

氏名	輿 恵理香
学位の種類	博士（ 学術 ）
学位記番号	甲 第 85 号
学位授与の日付	平成 30 年 3 月 20 日
学位授与の要件	信州大学学位規程第 5 条第 1 項該当
学位論文題目	棟持柱構造における伝承と伝播 —現代メソアメリカ北部地域と中世日本—
論文審査委員	主査 教授 土本 俊和 准教授 寺内 美紀子 准教授 柳瀬 亮太 准教授 羽藤 広輔 教授 花里 利一（三重大学）

論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、棟持柱構造の、各地域での伝承と各地域への伝播を明らかにすることである。

ここにいう棟持柱構造とは、地面から棟木まで達する柱つまり棟持柱を、少なくとも一本有する建築構造のことである。棟持柱構造は、地球規模での拡がり現代に遺存している。他方、この構造が先史にもあったことは、考古学的発掘資料や岩壁線画 **rock art** などを通じて知られている。本研究は、この棟持柱構造を対象とする。

ここにいう伝承とは、人類が手に入れた「知」が、それが生み出された地域で受け継ぎ伝えられることである。他方、ここにいう伝播とは、人類が生み出した「知」が、それが生み出された地域から他の地域へと拡がっていくことである。棟持柱構造は、人類が生み出した「知」のひとつである。この「知」の伝承と伝播が、地球全域へ人類が拡散していく過程と連動していた点を本研究は究明した。

人類が、アフリカ大陸からユーラシア大陸へ、さらにアメリカ大陸へ移動した経路を踏まえると、アメリカ大陸南端への経路の途中にあるメソアメリカが注目される。本研究は、まず現代メソアメリカ北部地域を対象としてとりあげ、この「知」の伝承と伝播の実態を明らかにした。

他方、ここにいう祖形とは、棟持柱構造の最も原初的な形態のほか、原初的な形態から発展した形態を含む。つまり、ここにいう祖形とは、原初的な形態のみに特定されるものではなく、遺存している建築遺構に先行する建築形態をも祖形として幅広く含むものである。したがって、ここにいう祖形とは、伝承と伝播の元となる形をも幅広く含むものである。この意味で本研究は、棟持柱構造の伝承と伝播において、各地域での伝承と各地域への伝播の元となる棟持柱構造を棟持柱の祖形と位置づける。

このとき、祖形に遡っていく一連の建築形態を鎖にたとえることができる。この鎖は、他の地域への伝播のほか、同じ地域のなかでの伝承によって支えられている。ここにいう伝承とは、伝播とは対照的に、同じ地域のなかでの出来事であり、その地域のなかで受け継ぎ伝えられていく事物のことである。無論、地域を小さくとれば、この伝承は捕捉されやすくなるが、地域をより大きくとるにつれ、伝承と伝播が互いに交わることになる。とはいえ、伝承と伝播の明確な差異は以下の通りである。つまり、「知」が限定された領域のなかで連綿と受け継ぎ伝えられていることが伝承であり、逆に、「知」が地球規模で拡がっていくことが伝播である。

ただし、ここでいう鎖には、研究上、ミッシング・リンク **missing link** というべき時空間が複数、横たわっている。これらのミッシング・リンクを一つひとつ克服していけば、現代に遺存する建築遺構から最も原初的な形態へと連なる一連の鎖を捕捉することができる。この鎖は、伝承という観点から見て、地域によって異なるものが複数あると考えられ

る。というのも、アフリカ大陸からユーラシア大陸へ、ユーラシア大陸からアメリカ大陸へ、という伝播を棟持柱構造という「知」について想定したとき、この「知」がある地に伝播した暁には、その地のより局所的な領域のなかで一連の鎖が伝承といういとなみの結果としてある、と考えられるからである。以上を踏まえ、本研究は、人類の地球規模の拡散の初期に陸続きであったメソアメリカ北部地域と対照的な文化領域として、海で鎖された日本列島のなかで中世日本を対象としてとりあげ、この「知」の伝承と伝播の実態を明らかにした。

棟持柱構造は、それぞれの地域で今も伝承と伝播を繰り返しているとはいえ、その姿が類似している点が注目された。類似しているこの建物に対して、地域によって姿の異なる建物に対して用いられるバナキュラーvernacular という語を用いるべきではない。たとえば、バナキュラーな建物とみなされる日本の民家は、それぞれの地域での伝承と伝播の結果、一定の地域的まとまりのなかでは類似した姿を持つものの、近世日本の全域を見渡すと、地域によって異なる姿が見られる。このような多様な姿を持つに至った、地域に根ざした建物の群を、一括してバナキュラーと呼ぶなら、棟持柱構造をなす建物をバナキュラーと呼ぶべきでない。

棟持柱構造は、先史から見られ、地球規模での拡がりを見せつつ、現代にも見られ、かつ、その姿が互いに似かよっているので、バナキュラーとの語で形容されるべきではない。棟持柱構造は、建築の発展の原初にある母体である。原初から受け継ぎ伝えられたものが現代に至っているという意味で、棟持柱構造をノストラティック Nostratic と形容されるべきである。ノストラティックとは、言語学に見える語で、独語 Nostratisch からきたもので、ラテン語 Nostras、Nostratに基づき、「われらが…」を意味し、「全人類の…」と解される。ノストラティックは、複数の語族を含む“大言語族”を形容する。棟持柱構造は、たとえていうと、個々の言語族や個々の言語に属すると解されるべきものではなく、この“大言語族”に属すると解されるべきである。この“大言語族”に属すると解されるべき棟持柱構造は、原初へ遡る祖形であるとともに、地球規模で現代に受け継ぎ伝えられてきたという意味で、生きている建築遺産である。

以上、現代メソアメリカ北部地域と中世日本を具体的な対象とした本研究は、棟持柱構造がノストラティックと位置づけられるべきである、と結論づける。逆に、本研究は、ノストラティックという概念を棟持柱構造に与えた、ということができる。

単純で簡素な形である棟持柱構造は、伝承と伝播を繰り返す過程で多様な姿を得ていくように見えて、その素朴な姿を保って地球規模で拡がっていった。人類が手に入れた棟持柱構造という「知」は、それぞれの地域で伝承され、さまざまな地域へ伝播した。この伝承と伝播を経て持続する単純で簡素な形を、本研究はノストラティックと呼ぶ。本研究の学術的な価値は、ノストラティックというこの概念を棟持柱構造に与えたことにある。